

# 要約

朴 光賢  
都市環境学専攻

本研究は、ソウルオリンピック(1988年)を契機としたソウルの都市改造について考察するものである。

韓国における高度経済成長期であった1960-80年代に、ソウルでは人口急増に伴い都市が拡張され、都市基盤の整備や住宅地の開発など都市の改造が計画・実施されたが、それに拍車をかけたのがソウルオリンピックであった。オリンピック会場計画は、運動公園と各種競技場・選手村の配置計画とそれらに至る交通計画からなるため、ソウルの都市計画中、特に公園緑地網と道路網計画と密接な関係がある。従って、ここではまずソウルの都市計画における公園緑地網と道路網計画の変遷を概観した上で、両者の相関関係を考察する。次にオリンピックの主会場となった蠶室(ジャムシル)地区開発について分析する。最後にソウルオリンピック会場計画の変遷を概観し、それとソウル都市計画における公園緑地網・道路網との相関関係を考察した後、主競技会場であるソウル総合運動場、オリンピック公園の配置計画について分析する。

まず1960-80年代におけるソウルの3時点での都市基本計画を取り上げ、幹線道路と高速道路からなる道路網に着目し、その変遷をソウルの地形に照らし合わせて分析した。「都市基本計画'66」では、格子状道路網をもつ既存都心部を中心として環状放射状道路網が形成されている。そこでは環状道路が内外盆地の内外縁に沿って設けられ、外四山の外側にまで拡張される一方、放射状道路が内外四山の谷に沿って設けられた。次に「都市基本計画'78」では、漢江とその支流にそれぞれ平行な幹線道路が設けられることで、格子状道路網が形成されており、それらが外四山裾まで及んでいる。「都市基本計画'80」は、地形との関係では上記計画と同様であるが、既存都心部で交差する双曲線状の幹線道路が格子状と環状放射状両道路網の特徴を示していることから、両者を折衷した道路網が形成されていると考えられる。

次にソウル都市計画用途地域制における緑地地域を取り上げ、その指定に大きく影響したと考えられる4時点での緑地地域の形状を地形と照らし合わせて分析し、その変遷を追跡した。60年代後半、ソウル市外縁の外四山近傍に分散配置されていた「山」の緑地地域が、1971年の開発制限区域の制定に伴い環状に結ばれ、文字通りの「緑地帯」となった。「建設部告示320号」(1978年)では、漢江支流沿いが緑地地域と指定され、その「川」の緑地地域によって格子状の緑地網が形成される一方、それが「山」の緑地地域と連結された。1980年12月に宅地開発促進法の制定以後、80年代には漢江支流沿いの緑地地域の先端部が宅地として開発され、「山」の緑地地域と「川」の緑地地域が再び分断されたと見ることができる。

1978年における道路網及び緑地網計画を見ると、両者とも漢江及びその支流に沿って格子状に設けられ、重ね合わされていることがわかる。これは70年代前半の漢江本流の

沿岸開発に続き、70年代後半になって漢江支流でも河川改修工事、即ち川幅を一定にし、その両岸に堤防と道路を設ける護岸工事が行われ、漢江支流沿いの緑地地域が開発される下準備がなされたと見ることができる。

オリンピックの主会場となった蠶室地区はその代表的な事例であり、ソウルにおける「川」の緑地地域と密接に関係している。同地区は、70年代前半に漢江南岸の大規模埋立地として開発され、70年代後半には地区両端の漢江支流沿いの緑地地域に主競技会場が計画・実施された。即ち、西側の漢江と炭川の合流部にソウル総合運動場が計画、両者の河川敷が駐車場や公園に供される一方、東側の城内川沿いの緑地地域にオリンピック公園が計画、城内川の線形が変更されると共にそれに合わせて様々な競技施設が建設されたのである。また同地区に至る道路が新設されたが、ここで建設された漢江に平行・直交する道路や橋は、80年代のソウル都市基本計画の道路網が選択的に実施されたものと言えよう。蠶室地区では、蠶室路北側は格子状、南側は放射状の道路網が巡らされており、2つの主競技会場を結ぶ蠶室路はオリンピック公園内の夢村土城に「山当て」するよう変更された。

ソウル総合運動場では主競技場短軸（東西軸）上に室内体育館が配され、敷地南東隅から対角線方向（北西-南東軸）にとられた蠶室路からの進入路が主競技場南門に至る。各種競技施設を結ぶ歩行者用デッキが北・西側の堤防と同レベルに設けられ、敷地地盤面上の車道と立体的に分離されている。ソウル総合運動場南側のアジア選手村では、主競技場長軸（南北軸）上に通された道路により、アジア選手村大街区西辺が限定されている。アジア選手村では段状の住棟が対角線方向に配置され、主競技場の「山」に呼応した人工的な「山」が形作られている。

オリンピック公園の各競技施設は野外公演場を中心にして放射状に配され、また敷地南隅から対角線方向（南北軸）にとられた進入路も野外公演場に収束する。各種競技施設を結ぶ環状の歩行者用デッキは車道より高く設けられ、歩車が分離されると共に、それが野外公演場に向かって低くなり、夢村土城跡という「山」に対峙した「谷」が形作られている。オリンピック公園南側のオリンピック選手村では、南部循環路に直交して野外公演場に至る主通路軸（北西—南東軸）がオリンピック選手村まで通されており、その主通路軸に対して段状の住棟が放射状に配置され、人工的な「谷」が形作られている。

1960-80年代のソウルの道路網と緑地地域は、格子状と環状放射状パターンの組み合わせと見なすことができるが、蠶室地区でも格子状と放射状の道路網が組み合わせられている。両者を区分する蠶室路は、夢村土城跡に「山当て」するよう通された結果、蠶室地区は南側のみならず東側にも広がる放射状の道路パターンをもつこととなり、それがオリンピック公園西隅の進入広場レイアウトに影響を与えた。主競技会場と選手村の大街区は、それぞれ環状や放射状パターンで構成されている。これら隣接する2つの大街区は軸的に関係付けられているが、それ以外の大街区あるいは地区全体と関係付けられていない。ソウル総合運動場とアジア選手村、オリンピック公園とオリンピック選手村によって蠶室地区の両端を示す特異なランドマークが形成されたが、蠶室地区全体は自立した大街区の集積に留まっているのである。